

京都大学 地理学談話会

会 報

第14号



2003

[目次]

寄稿

退官に際して思うこと……………	石原 潤 (昭和37年卒)	1
高校教師生活28年を振り返って……………	河合 保生 (昭和50年卒)	2
ただ今アナウンサー5年生……………	北野 剛寛 (平成11年卒)	5

講演会の報告〔由比濱省吾先生・山近博義先生・今里悟之先生〕……………	6
------------------------------------	---

研究室便り

〈石原潤先生の御退官について〉……………	10
〈退官記念事業の会計報告〉……………	10
〈国際交流について〉……………	11
〈研究室の動静〉……………	11
〈3回生と新院生の自己紹介〉	
〈昨年度の実習旅行〉	
〈学部卒業生・院生の進路〉	
〈院生の研究状況の報告〉	
〈学位の取得〉	
〈2003年度講義題目〉	

事務局から

〈地理学談話会2002年度会計報告〉……………	15
〈訃報〉……………	15
〈お知らせ〉……………	15
〈オープンキャンパス：2002年度の報告と2003年度のお知らせ〉……………	16
〈2003年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ〉……………	16

～寄稿～

退官に際して思うこと

石原 潤（昭和37年卒）

退官に際して、お世話になった7年間のふりかえり、所感を述べさせていただきたい。

7年間は、とにかく慌ただしかった。最初の1年間は、名大との併任であったし、2年目以降は、いつも教室主任や系代表が当たっていて、雑務に追われていた。特に後半の3、4年間は、人文地理学会、史学研究会に以文会のお世話まで重なって、ストレスが大きかった。加えて、文科省、大学評価機構、学会会議や学術振興会の諸委員が重なって、東京出張を繰り返していた。

そうした中でも、研究に関わる活動にはかなり時間を割かせてもらった。7年間で、海外調査、国際会議、親善訪問、講演旅行で、計11回海外出張をした。留守中、他のスタッフにご迷惑をお掛けした点が多かったと思う。ご寛容に改めて御礼申しあげたい。

そんな訳で、教育に割ける時間は限られていた。授業はおざなりに成りがちであったし、学生諸君への個別指導も徹底を欠いた。これらの点では学生諸君にあやまらねばならない。とは言え、学部と大学院の教育に関して私なりに留意し続けた点が無かった訳ではない。

まず学部について。京大に着任して最初に驚いたのは、卒業論文のバラツキの大きさであった。前任校では、卒論は大体「優」か「良」のカテゴリーに入るものばかりであったが、京大では「秀」を与えたいものがある一方、「可」や「不可」にしたものも含まれていた。その背景には自由放任

の京大の校風があると言えればそれまでだが、私の見るところでは卒論への取り組みの姿勢の違いによるようであった。以後事ある毎に、卒論とは企画・実行・発表を含む1大プロジェクトであり、その納得いく遂行こそが、実社会に出る者にも大学院に残る者にも、貴重な経験となり大きな自信となるのだと言い続けてきた。この「説教」が効いたのか、それとも単に学生数が減って教官の眼が届き易くなったせい、近年では卒論の手抜きが減ってツブが揃ってきた。結構なことだと思っている。

次に大学院について。京大に着任して感心したのは、大学院ゼミの水準の高さであった。院生のゼミでの報告回数は年2回に限定されているため、毎回の報告は高度な内容を要求される。質疑応答も厳しく、特に教官からの批判は辛らつですらある。多くの院生はこれに良く耐え、ぐんぐん力を伸ばして行く様子は頼もしい限りであった。しかし一部の院生は厳しい批判に落ち込んでしまったり、スランプに悩み続ける者も現れて来る。私は、相対的に年寄りである自分の役割として、これらの者にも声を掛け、それなりの前進を促すことが大事であると考え、やや意図的にそれを実行した。その結果が全て上手く行ったとは言えないが、大学院を修了しても「所を得ない」人の数を減らす方向には役立ったのではないかとと思っている。

京大地理教室が日本最古であるばかりでなく、最高レベルの教室であって欲しいとの願いは、新旧スタッフの共通した思いであろう。先任の諸先生のご尽力のおかげで、私の赴任の前年度に最初の課程博士が誕生し、以後はコンスタントに毎年2名前後が学位を取得する状況が続くようになった。教室が課している課程博士論文の基準は、全国の地理教室の中でも最も厳しいものと思われるが、院生諸君はこれに良く耐え、

博士課程3年間で論文を提出した者も少なくない。指導生の博論完成は、指導教官にとっても無上の喜びである。

以上のように、近年の地理教室はおおむね順調に推移していると言えるのだが、いくつか問題点がないわけではない。その第一は、優秀な学生をいかにリクルートするかの問題である。高校での世界史必修化以来、大学での歴史志望者の増加と地理志望者の減少が生じたことは広く知られているが、京大でも優秀な学部生をいかに確保するかがまず重要であろう。さらに大学院重点化以降、優秀な院生を一定以上確保することが常に求められている。これらのためには、従来とは異なった様々な工夫が必要となろう。

第二は、せっかく進学してくれた学部生や院生の中に、最近、メンタル面での不調を訴える者が増えている点である。これは閉塞感漂う時代状況の反映であると言ってしまえば簡単だが、本人達はそれぞれ苦しんでいるのであり、教室としてもゆゆしき事態だと言わざるをえない。専門家の援助を得ねばならないが、教室としては気長に回復を待つという姿勢が求められよう。

第三に、多様化する学生の関心に教官がいかに対応出来るかの問題がある。近年の院生の研究テーマは、伝統的に京大が強かった歴史地理やアジア・アフリカ研究に加えて、計量的手法を用いた都市研究や、ポストモダン風の社会・文化研究などが増えている。限られた数のスタッフが、これら多様化する学生の関心に対応して行くことは容易ではない。中長期的には、スケールメリットを生かせる方向での制度面の工夫が必要かも知れない。このことは、GIS教育の充実についてもあてはまるであろう。なお、アジア・アフリカ研究について付言すれば、私自身はその伝統を絶やさぬよう努力して来たつもりであるが、先輩諸

先生が期待しておられた本格的な中国研究者の育成までには至らなかった。

とは言え、これらの諸困難も優秀なスタッフと賢明な学生諸君によって、必ずや乗り越えられるものと信じる。京大地理教室の一層の発展を願って、筆を置くことにしたい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

高校教師28年を振り返って

岡山県立岡山大安寺高等学校

河合 保生(昭和50年卒)

談話会の中では少数派である高校教員に職を得て、今年で28年となった。もっともはじめから教職に情熱があったわけではない。事情があって故郷へUターンする必要にせまられた結果であり、「でも・しか」先生の一人といえる。大学院入試に失敗し再起を期して聴講生をしていた時、同期の矢野重文君とともに府立M高校の非常勤講師をしたことも影響したようである。

初任地は津山にある専門(職業)高校(津山東)であった。進学校の高校生活しか知らなかった者にとっては(大半の教員がそうであるが)、大きなカルチャーショックであった。生徒を机に着かせることがまず大変で、教科書は読めない、計算は出来ない生徒たちに困惑させられた。生活指導にも手がかかり、しばしば家庭訪問や校外補導を行い好きでもないパチンコ店のほしごもさせられた。ただ、一人一人の生徒は純朴であり、個人の存在感を認め、評価してやることで良好な師弟関係をつくる術が習得できた。

ある時、研修の一環で研究授業をすることになり、茶目っ気を出し一番指導困難な

クラスで実践を行った。「日本の農業」を指導したが、農家の子弟が多かったため思いのほか反応がよく、自分でも満足できる授業の展開ができた。その授業の様子は同僚の手でテープおこしされ文字となり、今も手元にある。それを初任教員研修の講師となった時に披露したところ、担当指導主事（現在の教育長）は早速そのアイデアを採用し、各自の授業テープを持参させ相互に評価しあうことを命じた。受講者にはいい迷惑であったかもしれないが、ビデオが一般化する前の段階では自己評価の点でも効果的であったと考えている。

3年後、新設校（備前東）へ異動となり、ゼロからの学校作りという貴重な経験ができた。図書費も潤沢にあり、この時とばかり高価な地理学専門書を多数購入した。図書館担当者からずいぶん嫌味を言われたが、その後の地理指導力を高める上で大いに役立ったと確信している。この頃故藤岡先生が奈良大学学生を引率され、津山へ巡検にこられたことがあった。学生時代は不勉強をよく叱られたが、この時は津山市内でご一緒いただき親しく痛飲したことや国府や一宮などの位置関係に関する研究テーマを示されたことが思い出される。

7年後、一転して旧制中学を母体とする県内屈指の進学校（岡山朝日）へ異動した。赴任時は年配の先生が多く、「10年ものを言うな」の風潮があり、教員室内にて大声で議論（むしろ口論）しあう様子は、まるで「坊ちゃん」の世界であった。ここでは15年間勤務でき、多くの仕事を与えられ、何かにつけてよく叱られつつ鍛えられた。授業では教科書を越えた内容も扱い、故水津先生から教示されたヨーロッパ村落研究をもとに延々と街村の話をしたり、故青木先生から教わったベーシック活動・ノンベーシック活動やランクサイズルールも扱った。地理の受験指導にもずいぶんエネ

ルギーを使い、受験問題集の編集にも幾度か携わってきた。

この間の経験で高校教育に対する確固とした自信を持つことができ、後年は責任ある仕事も任せられることになった。当時岡山県では高校改革が進められており、普通科の特色作りを教育委員会から命ぜられ、教務主任として責任ある立場におかれた。勤務校は往年の進学実績に凋落が見られ、過去の栄光を知る人々からは叱咤激励（ほとんど叱咤）されることが続いた。したがって、当然ながら特色作りの中心を進学に据え、京大・東大など難関大学への進学実績向上を使命とする改革案を策定した。京大・東大進学コースのカリキュラムも作り、外部にアピールした。県教委でもこのことには賛否両論あり、批判されたこともあるが、担当課からは思い切ってやるようにとの励ましも得た。伝統校故に注目され、マスコミの取材も受けTV画面に幾度も登場したため、知人からは随分冷やかされた。マスコミは都合のいい発言や映像のみを取り上げるため、インタビュー時の言葉選びには神経を使った。知らず知らずのうちに官僚的発言になっている自分にあきれることもあった。改革の成果を見ないうちに異動になってしまったが、今年の週刊誌（S毎日等）にも幾度か取り上げられており、評価を得ていることに一人にんまりしている昨今である。

授業ではスライドを中心とした視聴覚教材を多用し、興味関心を引くとともに具体的に分かりやすい授業を心がけた。このことは多分に浮田先生が授業で提示されたヨーロッパ各地のスライドの影響があった。このため教材の資料集めと称して、終業式前から1か月も海外旅行に出たこともあった。今から思えば顰蹙ものであるが。

外国の地図やコンピュータの利用も早くから取り入れた方であるが、遺憾ながら当

時は生徒用コンピュータをはじめ、液晶プロジェクター、ソフトウェアもなく、教育ソフトの多くは手製であった。BASIC等によるプログラミングも少しかじってみたが、自分に才なしといち早く断念した。どうも見切りをつけるのが早いのは、良くない性格かもしれない。学生時代、応地先生から工学部入学（2回生で文学部へ転学部）であった私に、「コンピュータをやってみては」とお声をかけていただいた。その時、本気で取り組んでいたら人生も変わっていたかも知れないが、向学心旺盛とはいえない私にとってそれは絵空事であったに違いない。その代わりとして思いついたのが、生徒によるプログラミングである。ケッペンの気候区分やハイサーグラフ作成ソフトはかなりできが良く、雑誌「地理」誌上にも掲載された。ただ、そこから発展できなかったのは不徳の致すところであった。

ところで高校では部活動の顧問を避けて通ることはできない。学校によっては、運動部系の活動が重視されており、指導にずいぶん時間とエネルギーをとられることがある。このため教職を志す場合、何らかの運動経験が求められる傾向が強い。部活動指導では、生徒の本音が聞こえてくることもおもしろい。生徒の教員評価は的を射ており、なにかと有益である。勿論、自分の評価もそれとなく聞こえてくるので、戦々恐々ではあるが。

私も軟式野球・サッカー・登山・写真などの顧問を務めてきたが、今も続けているのは登山と写真である。軟式野球の監督になったのは、単に野球が好き（当時トラ狂）であったのを野球ができるかと誤解されたことによる。口は災いの元であることを痛感。サッカーでは危うく公式審判員の資格を取得させられかかったが、資格をとると休日返上で試合に駆り出されるので何とかこれ

は逃げ切った。

登山は20代後半からはじめ、地理との関係も深く山岳部の顧問は進んで引き受けた。夏の北アルプス合宿が恒例行事で、毎年密かな愉しみであった。なぜならば生徒をダシにして公費出張で登山にいけるわけであるから、危険であることを差し引いてもこんなに美味しい校務はなかろう。一応生徒に行きたい山の希望を聞くのであるが、たいてい顧問任せになるので、白馬岳・立山・剣岳・槍ヶ岳・穂高岳などに何度いけることができた。ただ、穂高のザイテングラートでは浮き石にのって転落、ハイマツの上を十数m滑り落ち、危機一髪の経験もした。幸いハイマツにしがみつき大事には至らなかったが、思い出すたびに背筋が寒くなる。それ以後、山行が慎重になったのは言うまでもない。

教員になり数年たって研究室を訪ねた際、水津先生に「高校現場は雑用が多くて大変です」と申し上げたところ、先生が「大学も雑用だらけですよ」とおっしゃたのを思い出す。不満を言う前にしっかり勉強するようにとの示唆であったが、現在に至るまで不勉強であることを申し訳なく思っている。

今春から思いがけずも母校に勤務することになり、教頭として学校運営全般に関わっている。ただ残念なのは、地理の授業から離れてしまったことである。やはり教員は授業が生き甲斐であるとの思いを今更ながら痛感している。高校生も多様化しており、様々な教育課題を抱えているのが現状である。その中で教育における不易の部分を大切にして、生徒の志を高めその実現を支援し、人としての成長に関与できることを楽しみに、今後の教員生活を送りたいと考えている。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ただ今アナウンサー5年生

NHK松江放送局 北野 剛寛(平成11年卒)

「こんにちは。お昼の NHK ニュースです。今年1月、京都大学文学部地理学教室から NHK 松江放送局に入った連絡によりますと、教室より北野アナウンサーに談話会報の執筆依頼が寄せられました。北野アナウンサーは、『研究成果や教育現場からの報告をなさっている諸先輩方に交じって、自分のようにやっとの思いで卒業した者が寄稿させてもらってもいいものか』と戸惑いましたが、石川・金田両先生にご推薦頂いたとの知らせに、喜んで拙文を寄せたということです」

と、ニュース風に始めてみました。地理学教室、そして卒業生の皆様、お元気ですか？ 教室には一昨年ちらっと顔を出しただけで、なかなかゆっくりとお邪魔する機会がありません。もう卒業から4年も経ったのだと改めて驚いています。拙文で恐縮ですが、卒業後の私の近況をご報告します。

NHK 入局後、2ヶ月間東京でアナウンサー研修を受け、松江放送局に配属になりました(アナウンサーはまず出身地以外の地方局に配属されます)。人口15万の静かな街で、武家屋敷前の掘割を小舟が行き交うなど、城下町の風情が色濃く残っています。宍道湖に面した松江局は「日本一眺めのいい局」と言われ、水面に沈む夕日の美しさは格別です。

松江局の放送エリア(=取材範囲)は、東は隠岐島から、西は津和野まで、300kmにも及ぶ長〜い島根県全域です。高齢化率トップの過疎県、山陰本線はほぼ単線



・非電化、縦貫する高速道路がないなど苦勞も多いですが、海あり、山あり、川あり、湖あり、温泉ありの豊かな自然は決して飽きることがありません。出雲大社や遺跡の数々、それに各地に伝わる神話を訪ねるのも魅力です。県内のあちこちを取材して回っていますが、その際学生時代の巡検や聞き取り調査での経験が生きることもしばしばです。

と、地理っぽい話題はこれくらいにして、仕事の話に移りましょう。

NHK では平日17時から19時まで、地方局ごとにローカル番組を放送していません(京都では「とっておき関西」「ニュースかんさい発」)。島根では「情報満開！しまねっと」という番組ですが、私は昨年度からそのメインキャスターを隔週で担当しています(写真は番組中のひとコマです)。ニュースを読んだり(以前、出雲国府跡発掘調査指導委員の金田先生が来松され、そのニュースを私がテレビで伝えるという「珍事」もありました)、ゲストにインタビューしたり、スタジオを飛び出して中継リポートしたり。おかげで県内では街を歩いていると「いつも見てるよ」と声をかけて頂くことが多くなりました。

その一方で、スポーツアナウンサーを目指して修行中です。昨年度は、例えば高校野球では夏の甲子園のアルプスレポート、島根代表校のふるさと紹介（試合前にオルゴールと共に流れる1分ほどのVTR）、島根大会決勝のテレビ実況などを担当しました。ただ、全国放送のスポーツアナになるには、地方大会→甲子園のラジオ実況（早い人で6、7年かかる）→野球のテレビ実況→プロ野球・Jリーグ・ラグビー・バスケット等希望の競技とレベルアップが必要です。一人前のスポーツアナウンサーになるには数自体も少なく難関ですが、いつか全国放送で私の放送を皆さんにも見て頂ければと夢見ています。

NHKのアナウンサーは4、5年周期で全国各地に転勤します。地理学専攻ということもあって、その土地の人に会い、話を聞き、どっぷりと風土につかるこの仕事を楽しんでいます。私もそろそろ転勤です。次は関西？九州？北海道？でもその前に、島根には「宍道湖七珍（蜆・シラウオ・スズキなど）」や、日本海と中国山地の味覚など美味しいものがいっぱいです。何といっても山間の棚田で獲れる米が旨い！土壌・水・気候（寒暖の差が大きい）と三拍子揃っているからだそうです。その米からできるお酒（私は残念ながら強くないのですが）…。石川先生、金田先生をはじめ、皆様、いつでもお待ちしております！

最後に、地理学教室と卒業生の皆様のご健康と益々のご発展をお祈り申し上げます。

「以上、松江放送局からニュースをお伝えしました」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～講演会の報告～

2002年10月26日、文学部において、談話会秋季講演会として、由比濱省吾先生、大阪教育大学助教授山近博義先生、同大学講師今里悟之先生に講演していただきました。

日本とニュージーランドの ダム・水力発電の比較

由比濱 省吾
(昭和27年卒)

ニュージーランド(以下、NZ)は国土面積、緯度は日本と似ているものの、人口は360万人と少なく、特に農村人口密度が低い。ここでは、両国における水力発電ダムとそれにまつわる問題について比較したい。その前に、両国の燃料別発電生産量を見ると、日本では火力発電が最も重要で、水力発電の重要性は小さいが、NZでは水力発電の占める割合が圧倒的に高い。また、日本では原子力発電のウェイトが増している一方で、NZは国の方針により原発は行なわれていない。

日本の水力発電はもともと民間や自治体によって小規模になされていたが、第二次大戦の軍事体制下に「日本発送電会社」一社に統合され、戦後、地方別に9つの電力会社に解体された。一方NZでは、第二次大戦後に政府直轄の大規模な水力発電開発が行なわれ、発電・送電も政府の管理下に置かれた。ところが、1980年代の行財政改革により、発電・送電部門ともいくつかの電力会社に委譲されている。NZの大規模ダムは全て発電目的のダムであり、ワイカト川、ワイタキ川、クルサ川など、大きな河川の流域に立地している。一河川流域のダムが全て同一の電力会社によって経営されているのが特徴である。それに対し、日本

では発電目的のみのダムも多いが、近年は発電・用水供給・治水等を組み合わせた多目的のダムが中心を占める。また、電力会社のほか、電源開発会社、県庁、小規模自治体、企業などさまざまなダム経営主体が存在し、一河川の流域においても、異なる経営主体のダムが入り乱れているのが特徴である。流域のダムを統轄する組織を欠く日本のダム経営のあり方には、水害時に効果的な処置がとりにくいという問題がある。

NZ でも日本でも、ダムの存在が大水害の発生を助長している。発電目的のダムの場合、経営者側は発電量を上げるために、豪雨の場合でもダム湖の水位をできるだけ高く維持しようとする。そしてその貯水量が限界に達すると、ダムの崩壊の恐れから一気に放水するため、下流で大水害を引き起こされる。例えば、日本の成羽川や NZ のクルサ川はダムの存在が大洪水を引き起こす一因となったよい事例である。このことは日本に多い多目的ダムでも同様である。多目的ダムは発電や用水供給を主目的としており、洪水調整機能は地元のダム建設承認を得るための名目的な機能にすぎない。したがって、下流の住民が洪水の原因をダム管理者に求めて訴訟を起こしても、ダムにそもそも洪水調整能力がないためにやむを得ないとされ、敗訴する場合が多い。そのような中で、水力発電所が連立する NZ のワイカト川は、河水を遊水池へと導く水路の建設や、上流のタウポ湖における危険水位の柔軟な適用により、1995 年の大豪雨時に最悪の事態を防いだ模範的な事例である。

NZ にはユニークなダムや発電所がいくつかある。活断層上に立地するクライドダムは、断層に沿ってダムを二分しその間にプラグを設けることで、大地震時も崩壊しない構造になっているが、問題ではある。また、マナポウ湖沿いにあるマナポウ発電

所は、湖の景観を守るため、地下深くに建設されている。さらに、テカポ＝オハウ運河上に 5 つの水路式発電所を建設し、その豊富な水量によって、高い発電量を挙げているマッケンジー・カンツリーもある。

ダム建設時における、建設主体、県庁、住民の協議の仕方にも両国では差がある。NZ では 1991 年に資源管理法が制定された。これによって、ダムなどの大規模な開発を行なう場合、建設主体はもちろん、県庁も独自のアセスメントを実施することが義務付けられ、その結果は全て住民に公開されることとなった。そして、公表結果に基づいて、意見のある住民の全てに公聴会での発言権が認められており、多数決で開発の是非を決めることができる。このように、NZ での開発は民主主義に支えられたものである。これに対し、日本のダム開発はまだまだ建設主体に有利なものにとどまっている。

化石燃料は埋蔵量に限界がある。原子力発電には、運転中の事故に加え、使用済みの核燃料や老朽化したプラントの処理の問題がある。それゆえ、今後はリサイクルできるクリーンな資源に注目すべきである。しかし、水力発電には上述したさまざまな問題があり、「まず、ダム建設ありき」という考え方は危険である。今後は、上流に保水力のある木を植林して「緑のダム」を造成したり、よりよい河川改修のあり方を考えたりする必要がある。加えて、日本が世界一の発電量を誇るソーラー発電も可能性を持っている。

名所図会に描かれた風景
山近 博義（大阪教育大学）
（昭和58年卒）

名所図会は江戸時代後期に出版された名所案内記類の一つであるが、その出版状況から、1790年代～1800年代初頭に出版されたものと1830年代以降に出版されたものとの2期に分けることができる。同じ名所図会でも前期と後期では相違点も多く、既にいくつかの作品を事例に具体的な指摘がなされている。本報告では、京都を対象とした名所図会の内、前期の代表作である『都名所図会』（1788年刊、秋里籬島編・竹原春朝斎画）と後期の代表作である『花洛名勝図会』（1862年刊、暁鐘成他編・松川半山他画）とを取り上げ、両者の図絵にみられる相違点の検討を行うことを目的とした。具体的な検討点は、図絵の描写対象、図絵の描写法、作品中における図絵の位置づけの3点である。

まず、図絵の描写対象に関して、名所案内記類では、名所旧跡や寺社の紹介が中心となっている。両作品の図絵においてもこの点は共通しており、これらの景観図が図絵の大半を占めている。しかしながら、『花洛名勝図会』には『都名所図会』では稀であった市井の情景を描写する図絵が増えている。たとえば、祇園町の茶屋や五条の焼き物などの市中の店を描写したもの、四条橋や松原橋界隈の賑わいを描写したものなどをあげることができる。『都名所図会』でも、四条河原納涼などの年中行事にともなう賑わいの場や市中の若干の店は描かれている。これに対して、『花洛名勝図会』の図絵では、特定の年中行事に限定されない市井の賑わいの描写が増加しており、この作品の特徴の一つとなっている。

次に、図絵の描写法に関しては、『花洛名勝図会』の図絵の方が、よりリアルな描写が多い点を指摘できる。名所図会の図絵は、神社仏閣などを高所から俯瞰する形でリアルに描写するものが多い。これにより、各々の景物の位置関係がおおむね正確に示され、一種地図的な役割も果たしている。『都名所図会』のみならず、『花洛名勝図会』においても、このような景観図が半数以上を占めていることに変わりはない。しかし、『花洛名勝図会』には、対象をより低い視点から詳細に捉え、ある種の遠近法を用いてよりリアルな描写するものが登場するようになる。市中の描写でこれが用いられると、人物も詳細に描かれ、市井の賑わいのよりリアルな表現につながる。このような点は、既に、大坂の名所図会で指摘されていたが、京都の場合も同様の傾向が確認できた。

最後に、作品中における図絵に位置づけに関して、『都名所図会』の場合、基本的には、個々の図絵間の連関はみられず、図絵はあくまでも対応する本文の挿絵としての機能を果たしている。これに対して、『花洛名勝図会』では、このような機能に加え、図絵間の有機的連関がみられるようになっている。これには、冒頭の「東山全図」の存在が大きく寄与している。この図は東山一帯を俯瞰した図絵であると同時に、作品が対象とする範囲全体の概観図的役割を果たしている。このため、個々の図絵はこの図の一部分を描写しているという点で、相互に関係づけられている。その上で、場所によっては、その場所の全体から部分へ段階的にクローズアップしながら複数の図絵

を配置する工夫がなされている。このような図絵間の有機的連関は、図絵の作品における比重を高めていると評価できよう。このような工夫は、後期名所図会の出発点ともいえる『江戸名所図会』にもみられるものである。

以上のように、本報告では、京都を対象とした前期名所図会と後期名所図会を取り上げ、両者の図絵にみられる相違点に関して、既往の指摘の再確認をも含め、若干の検討を行った。その結果、後期名所図会にみられる新たな名所の登場、作品中における図絵の比重の高まりなど確認することができた。今後は、このような傾向が生じた背景や意義について、当時の社会的、文化的コンテクストなどとの関わりで考察する点が課題として残されている。

在米外邦図の所蔵状況の一端について 今里悟之（大阪教育大学） （平成10年修）

●はじめに

旧日本軍が軍事用に作成した日本国外の地図である「外邦図」は、戦後、国内外に散逸し、その所在や作製の実態そのものに関して、不明な部分があまりに多い。その所在が確認されているのは、現在、国内では東北大学・お茶の水女子大学・東京大学・国立国会図書館・京都大学・広島大学など20前後の諸機関、海外ではアメリカ議会図書館(LC)・アメリカ地理学協会(AGS)・大英図書館(BL)などである。

現在この外邦図をテーマとして、小林茂教授（大阪大学）を代表者とする科研プロ

ジェクト（東北大・お茶大・京大・阪大関係者など16名＋研究協力者数名）が、浅井辰郎先生（元お茶の水女子大学）など多くの方々のご助力を得つつ進行中である。このプロジェクトの一環として、外邦図の所在目録の整備・公開に向けて、作業が行われている。

その予備作業として久武哲也教授（甲南大学）とともに2002年9月に実施した、アメリカでの外邦図所蔵調査の結果を速報する。今回の調査先は、①LC（ワシントンDC）、②AGSのMap Collection（ウィスコンシン大学ミルウォーキー校Golda Meir図書館）、③ハワイ大学ハミルトン図書館（ホノルル）の3カ所である。

●作製地域と種類

外邦図が作製された地域は、千島・樺太・シベリア・蒙古・満州・支那（中国本土）・朝鮮・台湾・東南アジア・インド・南洋諸島など、アジア・太平洋全域に及ぶ。その種類としては、周知の地形図・海図・航空図のほか、兵要地誌図・陸海編合図・空中写真要図・市街図などがある。

兵要地誌図とは、道路の通行、海岸への着船、航空機の離着陸、水の供給、地誌一般、集落の人口など、軍事作戦に必須の情報が詳細に記入された地図で、地形図（時には現地国あるいは宗主国が作製したもの）の上に朱・青・緑などで文字・記号・線・面などが上刷されている。また空中写真要図とは、例えば河川とその周辺部のみを空中写真撮影し、それをスケッチ風に平面図化した応急作戦図である。

●議会図書館(LC)の所蔵図

まずLCのMadison館・Geography and Map部門では、中国・インドの一部のみを暫定的に調査し、索引カードの筆写と索引図のコピーを行った。シベリア・蒙古・満州では50万・20万の兵要地誌図、50万・10万・5万・2万・5千の地形図、1千200の

市街図など、支那では 50 万・10 万の兵要地誌図、100 万・50 万・20 万・10 万・5 万・2 万の地形図など、インドでは 100 万・50 万・25 万・12 万 5 千・5 万の地形図などが確認された。また Adams 館では、日系人スタッフの協力も得て、樺太の林相図、中国の産業図・宗教分布図、南洋諸島の邦人拓殖事業分布図、インドの鉄道図といった様々なカラー主題図のほか、中国江北地方の空中写真（推定 1 万分の 1）も確認できた。

● AGS の所蔵図

次に AGS Collection では、実物を一点ずつ確認して図幅情報を記録し、一部はコピーも入手した。シベリア・蒙古・満州では 10 万・2 万 5 千の兵要地誌図、10 万・5 万・2 万 5 千・1 万の地形図など、支那では 10 万・5 万・2 万 5 千・1 千 200 の地形図など、8 千ほかの市街図（特務機関測量）、朝鮮では 2 万 5 千・2 万・1 万・5 千の地形図など、台湾では 5 万・2 万の地形図など、東南アジアでは 10 万・5 万の兵要地誌図・陸海編合図・空中写真要図・地形図など、南洋諸島では 10 万～1 万 5 千の兵要地誌図などを、それぞれ確認した。また日本国内の地形図も、明治・大正期の 20 万・2 万 5 千・1 万（仮製ないし正式）の地形図をはじめとして、多数所蔵されていた。

● ハワイ大学の所蔵図

最後にハワイ大学では、外邦図は所蔵されていないものの、アメリカが日本の外邦図を複製した状況を示す、アメリカの地形図の索引図があることが判明した。

● おわりに

今後の課題としては、入手した図幅・索引図のコピーの詳細な検討のほか、日本やアメリカの軍事的展開の中で、外邦図がどのように作製・利用・複製されてきたのかを、明治期から朝鮮戦争あるいはベトナム戦争までのタイムスパンで検討していくことなどが考えられる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 <石原 潤先生の御退官について>

96 年 4 月の教授ご着任以来、当教室において 7 年間にわたり教育・研究にご尽力いただきました石原潤先生が、本年 3 月 31 日をもって、めでたく京都大学を御退官されました。

御退官記念祝賀会は、4 月 6 日、京都全日空ホテルにて約 110 名の方々のご出席により盛大に行われました。また、記念出版として、先生の他、22 名の名古屋大学地理学教室 O B と 32 名の談話会会員からの寄稿により、石原潤編『農村空間の研究（上）・（下）』が、大明堂より発行されました。

石原先生は、本年 4 月 1 日付けで京都大学ならびに名古屋大学より名誉教授の称号を受けられました。

御退官後は、奈良大学文学部教授として、引き続き、研究・教育にご活躍されておられます。

<退官記念事業の会計報告>

<収入>

退官論集申込（延べ 154 セット）	2,646,000
祝賀会参加費	1,188,000
祝賀会参加費（誤入金）	11,000
ご寄付	22,000
計	3,867,000

<支出>

郵送料	195,408
文房具	62,941
複写・印刷費	24,700
業績目録印刷費	67,095
交通費	16,030

祝賀会費(全日空ホテル)	932,011
論文集代金(大明堂)	2,156,000
※返金	501,000
口座手数料	10,245
計	3,965,430

※当初、記念出版『農村空間の研究(上)・(下)』の事業会予価(送料・税込)を2万1千円としておりましたが、最終的に1万4千円に抑えることができました。このため、70セット分の差額を返金いたしました。他に、誤って祝賀会参加費を2度振り込まれた方にも返金いたしました。

〈決算〉

総収入	3,867,000
総支出	3,965,430
計	- 98,430

〈国際交流について〉

昨年度4月から8月まで、青山裕子先生(クラーク大学地理学科・助教授)が外国人共同研究者として地理学教室に滞在され、情報化時代における起業形態の調査をされました。また、10月から12月まで、方一平先生(中国科学院成都山地災害・環境研究所 副教授)が滞在され、12月18日には講演「Urban pollution abatement and sustainable development in China」も行っていました。

11月20日(水)には、石川義孝教授の科学研究費プロジェクトの一環として来日されたビム・プラサド・スベディ先生(ネパール, トリブバン大学中央地理学科 準教授)が、「International labor migration from Nepal: emerging patterns and trends」と題する講演を行われました。さらに12月20日(金)には、阿部和俊先生のお招きで愛知

県立大学に滞在中の、J.-R. ピット先生(パリ大学教授・フランス地理学会会長)による講演「Status and situation of geography in France」も行われました。

なお、本年7月から12月まで、オーストラリアの西オーストラリア大学のデニス・ラムリー教授が当教室に客員教授として滞在され、後期には講義もしていただく予定です。

〈研究室の動静〉

教室の事務は、引き続き真木智子さんにお問い合わせしております。

本年度は、大学院博士後期課程8名、修士課程8名、学部4回生7名、3回生15名、学部聴講生1名となっております。

〈3回生と新院生の自己紹介〉

本年度は15名の3回生と2名の新院生(博士課程)を迎えました。簡単に自己紹介していただきます。

(3回生)

安形 俊太郎

旅と音楽とお酒が好きです。今年も海外に旅行に行くつもりです。お酒の好きな方、ぜひ仲良くなって下さい。

網島 聖

この度、晴れて地理学を専修させて頂くことになりました、網島聖と申します。出身は大阪府立北野高校です。主に山岳地域の自然や文化を地理的に考えてみたいと思っています。よろしくお願ひします。

石橋 弘嗣

石橋です。山登りなどを少々やっていたせいもあってか昔から自然に興味があるので

自然地理学をやりたいです。動物や植物などで成り立っている生態系がその地形とどう関係を持っているかなどをテーマにしようかなどと考えています。どうぞよろしく。

井上 安里

どこかへ行く日は緊張して朝はやく起きてしまいます。そして出かけ先でかーっとなって献血ルームにとびこんだりして、よけいクラクラになります。これからはもう少し落ち着きたいです。よろしく御願います。

林 久美子

この春まで小学生と一緒に遊んでいたもので、頭の中はすぐ子どもっぽいです。これまでと全く違う雰囲気についていけるのか正直少し心配ですががんばります。将来は、先生になって地理はおもしろいと思える授業をしたいなと半分くらい思う今日この頃です。

古川 昇平

古川昇平と申します。香川県の坂出市出身です。趣味は和装です。元々の興味が各地の地域性に興味が有り服装や食べ物はその最もわかりやすいものと思っています。出来れば、各文化の保存と共生について考えてゆきたいと思っています。

星田 侑久

はじめまして。学部3回生の星田という者です。一生懸命がんばろうと思うのでよろしく御願います。

宮澤 博久

様々な生業の文化地理・文化生態、人々が如何にしてそれぞれの環境を利用・認識し、適応しているのか、そしてその生業が

他の諸事情とどのように関わっているのか、という事に興味を持っています。神戸出身、趣味はカントリー音楽を弾くことです。

村岡 広紀

はじめまして。早いもので、もう研究室に入ることになってしまいました。今まで2年間はかなりさぼってきたので、いいかげん頑張ろうと思っています。マンドリンオーケストラでマンドラという楽器を弾いています。巨人ファンです。よろしく御願います。

守道 三恵

トレードマークは灰色のリュック。「いつも背負っているね」と言われて卒業を決意したものの、山へ行くときにはやはりこれではなくては。民俗や認知地図に関心があり、単なる興味で終わらせるわけには、と悩んでいます。屋久島と大文字山を愛する拳法娘です。

山口 滋

体育会バドミントン部所属で体力には自信がありますが、この2年間で頭の使い方を忘れてしまった気がします。これから鍛えてやって下さい、よろしく御願います。

山名 康晴

3回生の山名です。大阪出身でやっぱり阪神ファンです。サークルは山登りをやっていて夏休みは半分くらいどっか行っています。地理学についてはまだほとんど何も知らないんで、今年からそれなりには頑張っていこうかなと思います。どうぞ一つよろしく。

柳原 友子

岬の景色がとても好きで高校の時美術部合

宿で訪れた伊豆大島の海岸と港の風景は忘れられません。居合道部で道場に籠もることもあります。たまには自転車や徒歩で周辺を巡ったり祭りを見に行ったりと感性を大切に趣味を広げつつ学生生活を送っております。

横山 真也

3回生の横山といいます。京大硬庭というテニスサークルに所属しています。そろそろ勉強しようと思っておりますが、夏場にはすっかり日焼けして登場するかもしれません。たまにラケットを持ってウロついでるヤツがいたら、それは僕です。よろしく御願いたします。

渡邊 陽子

御飯の代わりに日本酒を、パンの代わりにビールとバーボン、漬物代わりにジンとウォッカにデザート代わりにワインを食す、真面目な21歳です。

(博士課程1回生)

エサウ・レイリン・ロロヘア

はじめまして、トンガ王国からのエサウです。トンガの首都ヌクアロファの出身。3年前来日し、大阪外国語大学で半年間日本語を勉強して、徳島大学で半年間研究生として次の2年修士課程を勉強しました。これからの研究テーマは南太平洋地域における国際人口移動です。

沖 慶子

今春、博士課程に編入しました。専門は地理学史・地理教育史で、近代のアカデミー地理学前史について博士論文研究をおこなう予定であります。研究室まで毎日階段で上るといふ決意はいついどこへ行ったのか、現在、捜索中です。どうぞ宜しく御願致します。

<昨年度の実習旅行>

2002年度は、10月15～18日まで、福井県小浜市において、2回生・3回生の計13名が調査を行い、報告書を作成しました。

<学部卒業生・院生の進路>

*学部卒業生

川平 夏也 文学部聴講生
久保 智祥 朝日新聞社
原 健太 フジテック(株)
福井 綾子 ネスレジャパングループ
室野 拓 大学院文学研究科
保江 志帆 大学院文学研究科
吉岡 朝日 (株) ジャパンヴィステック

*修士課程

中辻 享 大学院文学研究科
福本 拓 大学院文学研究科

*大学院博士後期課程

泉谷 洋平 博士後期課程学修退学

<院生の研究状況の報告>

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

D3 有留 順子

・性差から見た大都市圏における通勤パターン—大阪大都市圏を事例として—, 人文地理 49-1, 47-63頁(1997)《共著》
・東京大都市圏におけるテレワークと分散型オフィスの立地, 地理学評論 76-4, 44-55頁(2003)《共著》

D 3 上杉 和央

- ・飛鳥・白鳳期における寺院の立地について, 史林 82-6, 125-149 頁(1999)
- ・近世における浪速古図の作成と受容, 史林 85-2, 33-73 頁(2002)

D 3 山神 達也

- ・わが国における人口分布の変動とその日米比較, 人文地理 51-5, 79-96 頁(1999)
- ・わが国の3大都市圏における人口密度分布の変化—展開クラークモデルによる分析—, 人文地理 53-6, 1-23 頁(2001)
- ・日本の大都市圏における人口増加の時空間構造, 地理学評論 76-4, 187-210 頁(2003)

D 2 村田 陽平

- ・中年シングル男性を疎外する場所, 人文地理 52-6, 1-19 頁(2000)
- ・日本の公共空間における「男性」という性別の意味, 地理学評論 75-13, 813-830 頁(2002)
- ・男性・異性愛をめぐる空間のポリティクス—1999年の「西村発言」問題を事例に—, 人文地理 54-6, 557-575 頁(2003)

D 1 沖 慶子

- ・牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評, 地理科学 58-2, 65-91 頁(2003)

D 1 中辻 享

- ・森林管理面よりみた入会林野整備事業の意義—京都府宇治田原町・和束町を事例として—, 人文地理 54-1, 24-39 頁(2002)

D 1 福本 拓

- ・大阪府における在日外国人「ニューカマー」の生活空間, 地理科学 57-4, 255-276 頁(2002)

M 2 埴淵 知哉

- ・企業の空間組織からみた日本の都市システム, 人文地理 54-4, 389-404 頁(2002)

<学位の取得>

平成 14 年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は以下のとおりです。

* 論文博士

小林 茂:「琉球列島における人間-環境関係とその変動—農耕・災害・疾病の分析を通じて—」

岩鼻 通明:「出羽三山信仰圏研究」

<2003年度講義題目>

* 講義 (系共通科目) *

教授 石川義孝 現代地理学序説

* 特殊講義 *

教授 石川義孝 人口減少時代の人口地理学

教授 田中和子 都市地理学の諸問題

人環教授 金坂清則 地理学における人物研究の諸問題

総人教授 山田 誠 地域形成論

人環助教授 小方 登 空から見たユーラシアの歴史景観

理学部教授 岡田篤正 自然地理学

経研教授 藤田昌久 都市経済学

客員教授 D. Rumley, Political Geography: review and issues on Australia's regional relations

講師 生田真人 都市開発の理論と歴史

講師 高橋春成 人びとと生物環境の地理学

講師 石崎研二 空間分析と地理情報システムの応用

講師 岩鼻通明 宗教地理学

* 演習 I *

教授 金田章裕	地理学研究法Ⅰ	運営への振替	163,476
教授 石川義孝	地理学研究法Ⅱ	次年度への繰越	139,481
教授 田中和子	地理学研究法Ⅲ	計	¥ 302,957

*** 演習Ⅱ ***

教授 金田章裕	人文地理学の諸問題
教授 石川義孝	〃
教授 田中和子	〃

【運営会計】

〈収入〉	
資金会計からの振替	163,476
秋季懇親会会費	105,000
春季懇親会会費	89,500
計	¥ 357,976

*** 講読 ***

教授 田中和子	英語地理書講読
講師 松本博之	ドイツ地理書講読
文学研究科助教授 小山 哲	フランス地理書講読
人文研助手 村上 衛	中国地理書講読

〈支出〉

秋季懇親会経費	109,480
春季懇親会費・論文発表会経費	93,097
会報・名簿等印刷費	50,000
通信・文具等費	102,228
弔電等	3,171
計	¥ 357,976

*** 地理学実習 ***

教授 田中和子	
博物館助手 山村亜希	

*** 大学院演習 ***

教授 金田章裕	地域の諸問題
教授 石川義孝	〃
教授 田中和子	〃

< 計報 >

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(確認分、括弧内は卒業年、敬称略)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

米倉 二郎 (昭和 6 卒)
 國領 武一郎 (昭和 9 卒)
 村上 次男 (昭和 11 卒)
 井関 弘太郎 (昭和 23 卒)

事務局から

< 地理学談話会2002年度会計報告 >

(2002年4月1日～2003年3月31日)

【資金会計】

〈収入〉	
年会費	161,135
前年度繰越金	141,822
計	¥ 302,957

< お知らせ >

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。

(数字は卒業年、敬称略)

朝井 小太郎	昭和 06
都子 屋	昭和 15
林 宏	昭和 16
今井 平八	昭和 19

〈支出〉

楓 雅之 (泰昌)	昭和 20
田島 渡	昭和 23
木地 節郎	昭和 24
野田 茂生	昭和 36
岡本 靖一	昭和 42
石角 強	昭和 45
西尾 正隆	昭和 45
山田 (児玉) 憲子	昭和 45
福田 新一	昭和 46
池内 麟太郎	昭和 48
勝村 (赤座) 眞知子	昭和 48
西沢 仁晴	昭和 49
生田 博文	昭和 51
長谷川 正雄	昭和 52
遠藤 正雄	昭和 53
山口 一郎	昭和 55
貴志 謙介	昭和 56
山下 和久	昭和 57
松本 弘史	昭和 58
柿沢 洋雄	昭和 60
岡本 美津子	昭和 62
加藤 典嗣	昭和 63
那須 久代	昭和 63
荒賀 紀子	平成元
山下 良	平成元
新谷 泰久	平成 02
塚本 誠	平成 02
青木 秀和	平成 03
岩部 敏夫	平成 03
興津 俊之	平成 03
小口 稔	平成 03
坂部 誠治	平成 03
石村 裕輔	平成 04
江崎 健治	平成 04
大野 宏	平成 04
渋谷 良治	平成 04
中山 耕至	平成 05
御手洗 央治	平成 05
六嶋 美也子	平成 05
山口 岳夫	平成 06

大山 晃司	平成 07
川添 和明	平成 07
西山 隆彦	平成 07
吉野 修司	平成 07
遠藤 元	平成 08
石原 大嗣	平成 09
角田 (江下) 以知子	平成 09
中川 訓範	平成 09
川合 大地	平成 10
南部 一寿	平成 11

＜オープンキャンパス：2002年度の報告と2003年度のお知らせ＞

2002年8月8日・9日の両日、京都大学初めての試みとして、全学挙げてのオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会は、8日に行われました。2部交代制で見学希望者が各専修ごとにグループ分かれて研究室訪問や文学部の施設見学をしたりした他、全体説明会や教官への質問コーナーも開かれました。

地理学教室は、行動文化学系の当番専修として、オープンキャンパスを担当しました。各回とも30名ほどの高校生が参加し、地理実習室や博物館地図資料室を見学したり、卒業研究や卒業後の進路などについて説明を受けたりしました。

今年度のオープンキャンパスは、8月6日(水)に開催予定です。詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ(<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>)に掲載予定ですので、そちらをご覧ください。

＜2003年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞

本年は下記のように実施する予定です。で、よろしく願い致します。

記

日 時：11月1日（土）午後2時—5時

場 所：文学部新館1階 第二講義室

講演予定者：

デニス・ラムリー

（西オーストラリア大学教授）

小林 茂（大阪大学大学院文学研究科教授）

門井直哉（福井大学教育地域科学部助教授）

懇親会：同日午後6時より

文学部新館1階 第一講義室

☆本年度の談話会費（1000円）を未納の方は、同封の振込用紙にてお払いくださいますよう、よろしくお願い致します。

【編集後記】

今年はたくさんの新三回生・院生を迎えて、びっくりするぐらい研究室は活気づいています。学業についてのまじめな話だけでなく、遊びの話も盛り上がったりしています。こういう環境の中で、みんなそれぞれやりたいことを見つけ、目一杯がんばって、成長していきたいと願っています。

今回の談話会報は、原稿を早くからいただいていたこともあって、スムーズに発行することができました。ご寄稿・ご講演いただきました皆様、ありがとうございました。

談話会係：エサウ、沖、中辻、福本、真木

京都大学文学部地理学談話会 会報 第14号

発行日 2003年5月15日

発行者 地理学談話会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>